大豆のダイズクロハモグリバエ（新発生）

令和６年７月下旬に、石狩地方の大豆栽培ほ場において、大豆の葉の内部を幼虫が食害し、白色袋状の潜葉痕を形成する被害が発生した。被害は散発的ながらほ場内の広い範囲に認められた。潜葉痕は最大時の幅が２～３㎝程度で、時間の経過に伴って褐色に変色した。内部には一潜葉痕あたり１頭の双翅（ハエ）目幼虫が認められた。幼虫は老齢時の体長３㎜程度で、体色は乳白色である。発育を完了した幼虫は、葉から脱出して土中で蛹化し、蛹（囲蛹）は全長２㎜程度の俵状で色は赤褐色である。これらの蛹からは、８月下旬に体長２㎜程度の成虫が羽化した。成虫は体色が全体黒色で、平均棍は黒色で末端のみが僅かに白色を呈する。加害種は成・幼虫および囲蛹の形態からダイズクロハモグリバエ *Japanagromyza tristella*（Thomson）と同定された。本種は、本州以南では関東地方を含め比較的普通に発生が認められ、くずや大豆などへの寄生が知られている。

（北海道植物防疫協会・中央農試）

ダイズクロハモグリバエ　左：ダイズクロハモグリバエによる潜葉痕、右：幼虫
（岩崎氏　原図）